

国際的高齢化について 明石康さんに聞く

2014年5月26日（月） 鳥居坂の事務所にて

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長
堀内正範 朝日新聞社社友
岡本憲之 NPO・JTТА理事長



尾崎：元経企庁長官で官庁エコノミストの宮崎（勇）さんに最近お会いしました。わたしが大来佐武郎さんの後任の人口問題協議会の会長就任をお願いにいった際、「わたしは70歳で身辺整理したい」といって、国連からお戻りになったばかりの明石さんを紹介してくださった。90歳になられたいまもお元気そうでした。

明石：70歳の身辺整理は早過ぎましたね。宮崎さんは立派な人だけでも、意見が衝突しました。中国から学生を5、6人、奨学生として推薦したいとおっしゃるから、中国のような国から毎年5、6人を招くのは、太平洋にバケツの水を流すようなもの。それよりもごく短期の、2、3週間でいいから選別されたしかるべき人を、たとえば東京1週間、地方ならびに中国の人が行きたい見たいという工場とか、会いたい人に会わせたほうがよっぽどいいと思うといったのですけれど、受け付けてもらえなかった。

尾崎：そんなことがあったのですか。

明石：ぼく自身、国連代表部で日本政府の公使をやっている時に、ドイツに2週間招かれたのです。たった2週間に過ぎなかったけれど、最初の1週間は首都のボン。条件はただひとつだけ、ベルリンにも足を運ぶこと。ボンでは会いたい人に会えて、行くところ行くところで大学院生を通訳兼ガイドとして付けてくれた。その人と議論しながら歩く。とっても良かったですね。日本もそういうことをやればいい。おかねを使ってバカなことをしている。

尾崎：公使をなさっていた時のことでしたか。

明石：40代の初め。代表部で参事官、公使をやっていたころ。それで国連にもどれといわれて、49歳で国連にもどって18年。人道とか広報とか軍縮とか、カンボジアPKO、ユーゴスラビアPKO、それから人道問題の事務次長をして、国連を去ったわけです。

尾崎：わたしがお訪ねした時は、広報担当でおられた。小坂善太郎外相に同行していったのです。

明石：小坂さんが外務大臣の時に。

尾崎：明石さんにあちこち案内していただいて。あまりお行儀はよくなかったと思うのですけれども。

明石：良い外務大臣だったと思いますよ。何年でしたか。

尾崎：わたしが30代でした。

明石：すると中国代表権がまだ解決していないころ。小坂さん、愛知（揆一）さん・・・。
わたしが帰ってきたころ、宮崎さんは「OBサミット」に関係しておられて。福田（康夫）
さんはいまでも元首相として日中関係ではいろいろやってくれているので、中国側は福田
さんの存在を重く見ています。あしたお目にかかる。ぼくはいま「東京・北京フォーラム」
というのに関係しています。

堀内：日中関係はむずかしくしてしまいましたね。

明石：そうですね。解きほぐすのは容易でない。メンツがあって、どちらも最初の一步を
踏み出せない。

尾崎：わたしの友人で先輩の浅野勝人さん、NHKの記者で大平（正芳）さんの担当なん
かをして、議員を8年間やったのですが、いま彼が北京大学で客員教授として行って講義
をしています。

明石：「東京・北京フォーラム」は隔年で、北京と東京でやっているのですけれど、去年は
10月に北京でやりました。今年は9月に東京でやるので、その事前準備のために、6月
には北京へいきます。

尾崎：だいぶ長いことやっておられるのですか。

明石：今年は10回目で、ぼくは8年目。名ばかりの実行委員長で、運営委員長は工藤（泰
志）さん。「東洋経済」の人で、たいへん行動的な人で。

堀内：10回の経緯をもっている会とはいえ、政府間がむずかしい関係にあるので、むこ
うも安心して人のやりとりをしづらいのでは。

明石：中国にも中道派というのがいるんですね。もと上海の副市長をやり、全人大その他
で活躍して、中国の原子力を開発したひとりですけれど、趙啓正。こういう人はわりと平
気で、現実的な視点で前向きにいろいろなことを言います。そういうような人がつくって
いるグループなので。もちろん政府に気兼ねをしながらやってはいるのでしょうけれど、
われわれと気脈を通じながら。「毎日新聞」は山田（孝男）さん、なかなかのさむらいで。

尾崎：彼は読売の橋本五郎とふたりで今年の日本記者クラブ賞をもらいました。

明石：政治、経済、メディア、地方交流、外交・安全保障と5つの部門に分かれて丁々発
止やるんです。

尾崎：議論するんですか。毎年。

明石：毎年。議論するだけではなくて、なんとか共通点を見出そうと。

尾崎：新聞の人は入っているんですか。

明石：入っていますよ。朝日はいま社長になった木村（伊量）さん。NHKは加藤（青延）
さん。日中問題にたいへん詳しくて、司会などもやってくれています。

尾崎：孫文が1924年に神戸で、日本は「西洋の覇道」でなく「東洋の王道」を歩んで
くれといつて去りましたが、あのことばをそっくりお返ししたい気もするのですけれど。

戦闘機の接近など常道を逸している。

明石：そうですね。周恩来も鄧小平もお墓の中で悲しんでいるんじゃないですか・・・。

尾崎：きょうお久しぶりにお邪魔したのですけれど、「高齢化」の問題をわれわれでやろう、という話になりました。2022年というと8年後なのですが、日本で「高齢化」の世界会議を開催したらどうかという提言を、あちこちご相談をしてみようと思っているのです。今度の明石さんの研究会（人口問題協議会）の報告は、女性と青年が主でしょう。



明石：若者の問題、あまりにも遅れている女性の地位の問題、それから高齢者の問題。それから外国人労働者の問題。この4つに分けています。

尾崎：高齢者も入っていますか。

明石：入っていますよ。ひがまないでください。3～4週前になりますかね。『ロンドン・エコノミスト』が、「高齢化」の問題でいい特集をしていました。あれは注目に値しますね。つまり「高齢化」というのは衰えていくプロセスと捉えられがちだけれど、たしかに生理的・肉体的には弱くなっていくプロセスがあるけれども、メンタルなプロセスは必ずしもフジカルなプロセスと同じように退化はしない。また個人差がある。とにかく日本的に横にくくってしまって、「定年」させるというのはムダが多い制度である。そういうことを指摘している。これはぼくなんかの考え方と同じなんです。高齢者で働ける人、働きたい人がたくさんいるわけで、そうした人たちには働いてもらう。いわゆるライフワークバランスというのはおかしい。『日経新聞』にそう書いたら、けっこう賛成する人もいましたけれど。みんなスローガンで語る傾向があるので、少し現実的に精緻に時代を分析し考えていったら、いろいろ良いアイデアが浮かんでくると思いますけれど。2022年はわたしがいるかどうかわからないけれど。

尾崎：お元気そうだし。

明石：2022年に会議をやるかどうかより、社会を動かす提案ができればいいのであってね。

尾崎：国連のこれまでの経過からみると、最初に1982年にウイーンでエイジングの世界会議をやっています。20年後にスペインのマドリード。今度、これまでのようにいけば2022年になる。オリンピックはその前の2020年。それも関係づけてオリンピックは若者の祭典ですが、この国の元気な年寄りを元気づける意味もありまして。日本がなんといっても「高齢化」の世界のリーダーであるわけで、日本に対する期待も大きいわけですね。

明石：もっと早くやってもいいではないですか。

尾崎：最終的なゴールは2022年で、少なくとも4年くらい前にはアジア地域の会議をやる。

明石：それはいいですね。

尾崎：「人口開発会議」（1994年）は結局カイロで開催された。あれを日本でやろうということで、黒田（俊夫）先生とお話したときに賛成する人が多かった。千葉県の沼田（武）知事もおおいにやろう、ということだったのですが、厚生省が腰をあげなかったので失敗しました。そういう経緯もあるし、2022年を最終目標にして。どうしても明石さんに出番をつくっていただかないと動き出さないと考えています。

明石：そんなことはないですよ。エイジングでは、NGOをつくって盛んにやっている堀田（力）さんがいるでしょう。

堀内：堀田さんとはどこかで。

明石：あちこちで接触はあります。いま上げた若者の雇用の問題、女性の地位とか役割の問題、それに最近注目を集めている外国人労働者の問題、これは安易に使い捨ててみたいな形になっていて、国際的批判を浴びるに決まっている。日本は景気がいいときだけ使って、あとは放り出してしまう。ドイツもそういう非難を浴びたことが何度もありますけれど。これについては政府の諮問委員会なども意見を出していますけれど、それぞれの提案のメリット、デメリットを把握したうえで、超党派で、国民が納得してついてきてくれるような形でやるべきだと思う。ドイツとか南欧の国々では同様の問題があるようです。

尾崎：今度の提言の中には高齢者の問題は。

明石：入っています。提言はいいのだけれど前提になる理論的な基礎、分析がないと説得力を持ちえない。待ったをかけています。あと佐藤（隆三郎）さんとかの人口学者の意見もみっちり聞いてね。

尾崎：運動の歴史になってしまうところがある。

明石：さっきの4つの部門のうち、外国人労働者の問題が急速に進んでいる。それに待ったをかけるにしても遅れてしまっただけなので、この問題について近々のうちの協議をおこなうという線でやっているのです。

尾崎：人口移動の問題に絞って。

明石：別に絞る必要はないけれど、問題の所在を洗ってみようということで。外国人労働者を毎年何十万人か入れようとかいろんな提案がありますが、基礎がぐらぐらしてはダメなので。

尾崎：高齢者の問題も至るところで問題になっているので、これもしっかり考えて動かないと。今から始めれば8年あるのですが、人口問題協議会でも取り上げてもらえませんか。

明石：会議というよりはこの問題は社会的経済的その他の側面からみて成熟してきた時期に到達してきているということで成功の可能性はある。

尾崎：当初の段階では日本の開催地としては首都圏全体を考えていて、堂本（暁子）さんが知事をしてきた千葉県もいい条件をいろいろ持っています。幕張メッセができたばかりのころの「人口会議」招致での沼田さんとのこともあるし。明石さんのような方々のご賛同を得て。

明石：若い人が提案すればいい。

尾崎：いえいえ。この前、「高齢社会対策大綱」を改訂（2012年9月）したのですが、慶応の清家（篤）さんがまとめ役だったわけですが、これまで高齢者は「支えられる高齢者」のことばかり考えてきた。元気な高齢者を「支える側の高齢者」として活躍していただくという転換です。野田（佳彦）さんが閣議決定したのですが、あまり注目されていないのです。

岡本：高齢者はこれからは虚弱高齢者というイメージだけではダメで、社会的資源として、社会と積極的に関わって、むしろ支える側面にもっと光をあてないと。そういうことを打ち出せる会ができるといいなと思っているのですが。

明石：大賛成ですね。ある意味では若い世代というのは、われわれよりもじじくさいところがあって、慎重であったり、むしろ保守的であったり。この間の都知事選挙なんかでも20代の人々の4分の1が超保守の人に投票したといわれていますけれど。核武装を鼓吹する改憲論者の筆頭ですから。若者らしい未来向きな見方ではないと思いますけれど。

尾崎：国民投票法では有権者の資格を20歳から18歳に下げようとしています、若い人には参加の意欲が感じられない。

明石：いろんな意味で早熟の傾向が出ているわけですから、18歳にすることは考えるべきだとは思いますが、その結果がどういうことになるのか。かえって保守的な結果になりかねない。来年で戦争が終わって70年になりますからね。

尾崎：単なる高齢者の問題というより若い人もまじえて、日本の文化というかこれからの道筋について議論する機会にしたいですね。

明石：そうですね。これは深刻な問題になりますよ。新聞の投書欄なんか読んで、70代80代の人々の意見のほうがむしろ進歩的ですよね。

岡本：最近の若者はどうなっちゃったんでしょう。挑戦しなくなったのでしょうか。

明石：少子化の結果でもあるのでしょうかし、親がとくに母親が子どもに対して保護者的な傾向にあることが影響していると思いますね。大学の卒業式・入学式に両親ときにはおじいさんおばあさんまでついてくる。関係者に聞くと、学生数の倍か3倍の席を確保しなければならないという。

岡本：ひと昔前には父兄がついてくると珍しくて、むしろバカにされましたですけど。



明石：いまはひとりで出てこれないらしい。

尾崎：元気な高齢者を使うとしても、それで若い人がマイナスになるといけないので、むしろ若い人を助けるつもりでないと。

明石：そうそう、若い人の若さを引っ張り出すのがむしろ高齢者なのかもしれない。いろんな塾に関係しているのですが、毎年夏、福岡県の宗像市で「次世代リーダー養成塾」をやっています。全国の高校生200人近くを集めて2

週間かんづめにして、いろんな講師を呼んで議論をする。それを真剣に受け止める。マレーシアからはマハティール（元首相）がそれを楽しみに出てくる。ここ10年余りやってきましたが、去年から今度は中学生を対象にして「未来人材育成塾」が会津若松で始まりまして、東大の前の総長だった小宮山（宏）さんのお声がかりでやってみたら、優秀な中学生が集まったので今年もやろうということになった。それから群馬県では「明石塾」をつくってくれて、「国際的に堂々と発言し行動できる人材」を養成するというので、これも十数年やっています。

堀内：それは中学生ですか、高校生ですか。

明石：高校生です。非常に優秀ですね。

岡本：優れた高齢者の方には次世代のために、何かそういったことを残してもらうのが重要な気がします。というか、それが高齢者の方の役割という気がするのです。わたしなんかはまだ域に達していませんが、次世代に何かを残すのは大事でありすばらしいことだと思うんです。

明石：そうですね。やさしくわかりやすく説得力を持ってやると同時に、よちよち歩きでもいいから若い人にみずから歩かせてみる。あまりアドバイスしたり指導したりすると萎縮させてしまう。失敗をしてその中から学んでいくことも大事です。

堀内：マハティールさんはだいぶ前からお出でになっておられる。

明石：マハティールさんも80代の半ば、奥さんもほぼ同じくらい。ずっと前から毎年来るのを楽しみにしています。マハティールさんを説得したのは「毎日新聞」の加藤（暁子）さん。加藤さんが手塩にかけてやっておられる。榊原（英資）さんなんかも関係していますが。

堀内：マハティールご夫妻は特別なのかも知れないけれども、あのくらいの年齢の方で、大戦後の日本のことをよく知っていらっしゃる方が、たとえば10人とか15人とか、優れた先人として日本に集まっていたらいいとお話していただく。そういう会も2022年より前にありうるのかと考えています。

明石：そうですね。ぼくは今、リ・カンユウの書いたものを読んでいます。まさに戦後日本に目をつけて、日本のあり方から数多くのことを学んでいる。ああいう人を連れてこられたらいいでしょうね。

堀内：いいですね。先生、10人くらい集めてください。

明石：来たい人もいますけれど、来たいと連れて来たいとは別問題ですね。

堀内：「高齢化に関する世界会議」は20年ごとで大事だと思うし、オリンピックは4年ごとですけど・・・

明石：いや冬季もあるから2年ごとに国連総会は決議を採択しています。オリンピックのために戦争が起きているのです、残念ながら。

堀内：スポーツとして、あれは平和のうちに戦う力を競うわけですから、あり方としては平和の祭典なのだけれど、そこを言わなすぎる。

明石：ルールに従ってね。

岡本：そこが重要なのですね、ルールというのが。

堀内：そう、そのところが大事なので、すべての状況の中でルールが成り立てば戦争なんて起きてこないわけだけれど。スポーツとしてルールを決めて、世界中の若い人が集まって力の限り戦う。戦うことと平和とのありようをきちっと見ていくことが大事なんだけれど、ただ金メダルだとか建物をつくるとかが表に出て騒いでいる。



明石：あれもね、現代のオリンピック関係者が歪めているんですね。勝った人の国歌を吹奏し、その国の国旗を掲げる必要はないわけです。個人の優れたアチーブメントを、みんなでも嬉ぼうということにあるはずなんです。

堀内：本来そうですね。それをこの国でどういう形でやれるのか。ともかく招致を決めたわけですからやらざるをえないし、上手にやってほしいのですが。そういう時期に、安倍首相は、健全な高齢者に参加のメッセージをまったく送ってきていない。女性と若い人のことしかいわない。こういう政権が動かしていくと、オリンピックそのものも本来のありようと違ってくるし、高齢者はいよいよネグレクトされてしまう。それがこわいですね。それなら若い人も女性もそして高齢者も、同時に力を見せたらいい。人材はいるわけですから積極的に見せたらいい。そういう存在感をオリンピックとともに示さないで。

明石：そうですね。提案するのでしたら、遅きにすぎるとよりは早きにすぎたほうがいい。

堀内：早きにすぎないと思いますけれど、尾崎先輩と岡本さんとそのあたりのことを話していて、まずは明石さんに相談しようということになりまして、今日おたずねしたところです。オリンピックでいろいろなことが動き出すと同時にしかけたほうがいいのではないかと。65歳から90歳の方で、100歳を超えた方もいますけれど、日本から呼びかけてそういう優れた高齢者の力を合わせて国際的に平和をアピールしたら、これはオリンピックよりはるかに世界に対して衝撃力がある。日本やっているな、と。きょうはそういう思いをためて九十九里から明石さんにお会いするためにやってきました。

明石：九十九里浜で新鮮なサカナを毎日食べて、元気で長寿の秘密ですね。

堀内：はい、ひそかにそうしていますけれど。太平洋に向かっていきますと、千葉県の方は東京の横っちょにあると思っただけで、TPP交渉ではないけれど、パン・パシフィックの視点で見えてきます。九十九里で遠くをみていて島が見えるわけではないけれど、中国の学生が訪ねてきてくれたので、太東岬に連れて行って、「ほら、ハワイが見えるだろう」といったら「どこですか」。中国の人は海に対してはほとんど関心がない。それなのに最近出ばって来て困るのですが、それはともかくとして、日本は大陸の横っちょにある小さな島国ではなくて、3000kmの海岸を持つ海洋大国としてパン・パシフィックでやったらいい。そういうことを海を見ていると感ずるのです。

明石：よくわかります。尾崎さんは高知でしたね。高知の桂浜、あそこに立つとまさにパ

ン・パシフィックの発想に満たされますよ。

尾崎：高知の旧制高等学校の寮歌がありましてね。「この浜寄する大波はカルフォルニアの岸を打つ」。

明石：講演をしてから桂浜に行って感じたのですけれど、グローバルなんて言わないでも気宇壮大になります。

堀内：実際に海流に乗ってきたのでしょから、こちらから思えばさうとう気宇壮大な風景が見えてきます。東京生まれのわたしが周辺都市を飛び越えて九十九里に居をかまえたのは、いまは正解だったと思っているのです。

明石：すごい発想ですね。お気持ちはわかります。この9月に西安で、日中韓三国の国連協会の会長会議がありまして、それに合わせて、3カ国の学生による「日中韓ユースホーラム」(第5回)で共通のテーマのもとに「模擬国連」をはじめ、いろんなことを議論してもらおうという。日本の国連協会が始めて、日本、中国、韓国とまわって、去年は札幌でやってとても成功しました。今年は中国の西安でやります。それぞれ20名ずつの大学生、ホストカントリーは倍の40名。政府間はいろいろややこしい問題をかかえていますけれど、若者たちは仲良く喧々諤々の議論をしてくれています。うれしいです。

堀内：いいですね。そこだと思うのです。水玉模様のように核ができて広がっていく。そういう議論が行なわれる西安で、見ている周辺の市民の意識が少しずつ変わっていないだろうか。お互いに不要な猜疑心によって、友好とは逆に世論が動いている。日本の市民も不要な猜疑心によって中国キライになっている。

明石：世論調査によると相手の国に90%までが批判的になっている。しかしこれはまた変わるでしょう。

岡本：マスコミの影響ですか。

明石：そうですね。

堀内：キモに銘じています。マスコミもいろいろありまして。

尾崎：「国連協会」の会長もなさっているのですか。

明石：会長は裏千家の千玄室さん。91歳かな。固有名詞なんかどンドン出てくる。ぼくは副会長のひとり。もうひとりの副会長は国連大使をやった学習院院長の波多野(敬雄)さん。相変わらず口は悪いから大丈夫です。

岡本：さっき玄関ロビーでお待ちしていたら、さっさと帰ってこられて。東京大学のジェロントロジーの秋山(弘子)さんの何万人かの調査によると、1割ほどの男性は高齢になっても衰えない。歩いている姿を拝見してそれを思い出しました。

明石：貧乏ひまなし。

尾崎：明石さんは若いときから。そうなんだよ、だから女性にはもてない。

岡本：置いていかれてしまう。

尾崎：そんなわけで会議屋さんになるつもりはないのです。

明石：価値はあると思います。

尾崎：ぜひ相談相手になっていただければと。

明石：いまオリンピック、オリンピックで、草木もなびいている感があり、6年後のオリンピックの後のことを何も考えていない。10年先20年先のこの国の将来の姿を、長期的な青写真をつくって、その方向にむかって進んでもらいたいですね。

堀内：本来、政治家はそういう人たちが出てこないと。

岡本：6年後とか8年後では票にならない。政治家が票を読むには先過ぎる。

明石：オリンピックの直前に、何か大きな災害が起きるような気がするのです。

岡本：ありえますね。東南海とか直下型地震とか原発関連の事故とか。世の中が騒然としてくる予感します。

明石：日本人のことだから応急処置をとってなんとかやるとは思いますけれど。やたら大きな競技場をつくったりするのは間違いですね。やるべきことはたくさんある。

岡本：たしかに1982年のウイーン、2002年のマドリードとあったけれども、20年後の2022年に第3回をやる、とはどこにも書いていない。20年ごとと決まったことではなく、必要なら来年やってもいい。

堀内：そうかな。国連の場合は5年刻み10年刻みでフォローする会合があって、この世界会議は、わが国が率先して手をあげて、第3回は日本がやるというのが大事な発想であって、そうすることで、歴史のリズムをつくる。次の2042年の開催がインドでやるか中国でやるかわからないけれど、またゆるい感じで流れが見えてくる。

明石：ひとつの答えがあるということではないと思います。この問題はいろんな国にとって重い課題になっているので、テンポを速めてもおかしくはない。本会合はそういう間隔でいいから、準備会合を手前でやるとかでいい。そこでウォームアップというか、みんなで話し合う。あるいは分業によって特別な課題に力をいれて研究して事前にやるというようなこまかい作戦もありうると思うし、そういう意味ではオリンピックの2年後はやや間延びがしている感じがあるので、オリンピックの2年前くらいに何かあっておかしくない。

堀内：いいですね。

岡本：2018年、4年後ですね。現実の問題という実感がある。

堀内：2022年を世紀のテーマの一里塚として置いておいて、そこに向けて刻んでいく。

岡本：なぜそういかというと、千葉の柏市に東京大学の高齢社会総合研究機構の社会実験のサイトがあるのですが、最近はとくに東アジアから見学にくる。柏市の福祉部長をやっていた木村（清一）さんが退任して東大に専門職で雇われて、東アジアから見学にくる人の対応をしています。現在でも急速に高齢化が進んでいることからみて、8年待つ必要はない。



明石：おっしゃるとおりだと思います。

堀内：4年後くらいに国連主催でアジア地域の会合はありえますね。時期的に。

明石：あってほしいですね、少子化・高齢化問題は裏表一体ですから、韓国は日本より進んでいますし、中国も10年以内で追いつく。香港、台湾、シンガポールも苦しみはじめています。アジアというより東アジアですね。インドも10年か15年の時間を置いて追いかけている。準備会合であり東アジアの地域会合でもあり、という形でやるのがいいかもしれませんね。

堀内：オリンピックの2年前、東アジアでも10カ国くらいは来ます。

明石：はい、いいと思います。また東アジアでは儒教とイスラム教、ヒンズー教、そういうものが同じ問題の違う側面をとらえているわけです。東アジア・イスラム学会をつくるから臨時の会長にといわれています。イスラムのイの字も知らない。イスラム教徒の数は3分の1くらい。

堀内：でもいま明石さんにイスラムのほうに行ってしまうと、儒教、仏教のほうは困ってしまう。

明石：中国は新疆その他イスラムは少数民族ですけど、仏教徒も。共産主義者だってひと皮めくれば儒教とか道教とか。

岡本：意外に仏教徒って人口は少ない。キリスト数は20億人ぐらいいて、次がイスラムで15億くらい。仏教は数億で少ないです。

明石：韓国はキリスト教徒も多い。

尾崎：社会学者の橋爪大三郎さんが最近、「日本に宗教はない」と『毎日新聞』に書いていました。言い過ぎではないですかね。

明石：一神教ではないということでしょう。

堀内：宗教の問題はたいへんです。とくに一神教は。

明石：ローマ法王がイスラエルとパレスチナの仲介をする。

尾崎：エレサレムにいくと三つの聖地が小さいところにかたまっている。あれは共通の祖先ですよ。

明石：一神教です。ぼくはスリランカ問題の政府代表をやっているのですが。スリランカは仏教徒が70%で、タミール系のヒンズー教徒を迫害している。国連の人権理事会で大きな問題になっていて、日本が西欧社会とスリランカの間に立って、いろいろやってあげているのです。

堀内：それは大事な日本の役割ですね、やれますね文化的に。

明石：そうです。スリランカの大統領がとても感謝しています。

堀内：そういう意味合いで、日本人の日本民族の歴史伝統である宗教に対する寛容さは、一神教のところにはありません。

明石：そうですね。WCRP・世界宗教者平和会議は、日本のイニシアティブで始まっていまも続いています。立正佼成会なんかがとても熱心で。

尾崎：あれは毎年やっているのですか。

明石：もっと頻繁に。比叡山の仏教関係者がいまは準備委員会の委員長をやっています。立正佼成会の庭野日鑛さんが「庭野平和賞」を国際文化会館でやってくれまして、アメリカ人のNGOの女性が受賞しました。9・11以来、そういう宗教者の横のつながりが大事だということに世界が気づいたようで。日本の仏教と神道の人、それからキリスト教の人、いろんな宗教の人がいっしょになっていて、創価学会だけがわが道を行くで独立していますが。あとはみんなWCRPに参加して活動しているのはいいことだと思います。

尾崎：明石さんは宗教者としてではなく、国際平和活動の学識経験者のお立場で。WCRPの機関誌のグラフで拝見しました。

明石：そうですね。趣旨には大賛成なので。国連時代からの付き合いがありましたから。ウ・タントが三代目の事務総長であったときに、よく国連にきていたのです。

尾崎：日本だけではなくて、あちこちでやっているのですか。

明石：そのようです。ローマ法王ともお付き合いがあるようです・・・

堀内：日本だからできる大事な活動ですね。

尾崎：今日はいろいろ貴重なお話をうかがいました。長い時間ありがとうございました。

明石：ご趣旨はわかりましたし、賛成ですし、是非おつづけください。われわれの勉強会も決して高齢者を忘れてはけませんので。

止